

いじめとケンカとコミュニケーション能力

2012年8月 理事長 片山喜章

「いじめ問題」は、保育園においても本腰を入れて真剣に向き合わないといけない重要課題だと認識しています。なぜなら、脳のある部位が委縮していることが原因で、いじめることを快感に覚えるらしく、委縮の原因が乳幼児期の過ごし方（親や保育者の過干渉等）にあるらしいからです。昨今の報道を見聞きしていると「いじめ」ではなくて、一方的な暴行事件、傷害事件、恐喝事件です。ですから理由があってぶつかり合うケンカ（ケガに至ることも）とは全く異質です。80年代半ばくらいからいじめを苦しめて自殺するケースが生まれ出ました。それは大人が子どもに寄り添えなくなってきたからだと感じています。いじめられた子どもに対して、家族だけでなく学校や教師や友達がその時々真剣に寄り添うことで防げた自殺は山ほどあったと思います。

マスコミは学校や教師を批判しますが、これはある種のいじめで解決には至りません。問題のないことが良い、とする評価制度が導入されたり、模索中だったゆとり教育が否定されたり、面白い授業を生み出す風土が奪われたり、真の原因は、私たち日本人全体に広く深く根付いている閉鎖性、事なかれ主義、封建性、保身の強さ（貴方はないと言えますか？）であると思います。

保育園では、乳児期の噛み付きや引っ掻きは、いじめとは異質ですから、加害者をよりケアして落ち着かせる、逆に満3歳以上は事件を見逃さない（これが物理的に困難）で加害者を真剣に諭している場面を被害者が見ること、そして、被害者をしっかり守る、守っているよ、というメッセージを送ることが大事であると現段階では考えています。今、いじめが広がる一方で、ケンカはずいぶん少なくなったと感じます。悔し涙を流し、鼻血を出して、双方が罵声を浴びせ合うようなケンカを大人たちが押さえ込んできた事といじめの増加は無関係ではないと思います。

実際、ある施設では、2歳児クラスのと時から4歳児クラスになるまで、連日、派手なケンカをくりかえしていた2人が5歳児になった頃から次第に仲良しになり、卒園して違う小学校に通っても互いに行き来するほどの間柄になっています。つまり、園生活のなかでお互いの“気持ち”を表現し合うことによって、人は生まれながらにして持っているコミュニケーション能力を顕在化させ、頭の中の言葉ではない本物の“思いやり”が育まれていくのだと思います。

お互いの思いと思いをぶつけ合うと“思いやり”の精神が醸成され、陰湿ないじめを嫌う価値観を育むとともに、いじめられている仲間を救う力を発揮する可能性を秘めています。どんな子どもも持っている“遊び心”や“探究心”“運動欲求”や“自己顕示欲求”を奪わない保育が、生活習慣の自立にもまして重要で、加害者をつくらない保育です、それらが大人によって遮断されると行き場を失った生きる力（エネルギー）は、いじめへと向かわざるを得ない気がします。

コミュニケーション能力が問われているのは、実は、いじめを案じている私たちです。保育者間だけでなく保護者の皆さまとも、しっかり意見交換する！ そんな関係づくりが必要です。